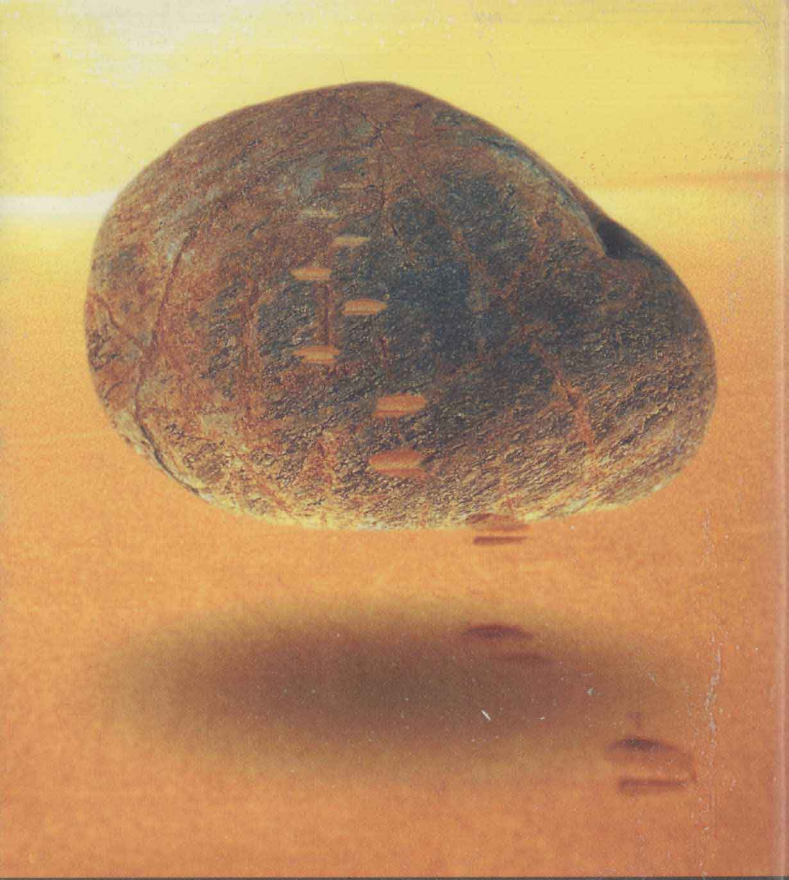

KAPPA NOVELS

長編推理小説 書下ろし

鎌倉(かまくら)・ユガ洞(どう) まぼろしの誘拐

浅黄(あさぎ) 斑(まだら)

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
(〒112-11)
光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理小説 鎌倉(かまくら)・ユガ洞(どう) まぼろしの誘拐

1996年3月5日　初版1刷発行

著者　浅黄(あさぎ)　斑(まだら)

発行者　森元順司

印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 00160-3-115347
株式会社 光文社
電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Madara Asagi 1996

ISBN4-334-07179-1
Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03—3401—2382)にご連絡ください。

定価 840円

長編推理小説　書下ろし

鎌倉・ユガ洞　まぼろしの誘拐

浅黄　斑

カッパ・ノベルス

目次

プロローグ　5
第一章　誘拐事件発生　7
第二章　コールバックシステム　37
第三章　石のラビリンス　65
第四章　ペナルティ　103
第五章　ガマエの秘法　129
第六章　十六個のダイヤモンド　154
第七章　ダイヤモンドが消えた　184
第八章　金剛蓮華密教の会　209
第九章　全面自供？　237
エピローグ　267

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本文カット／文月（ふみづき）　信（のぶ）

プロローグ

古都鎌倉は、海になだれ込んでいく丘陵地に囲まれている。町並みは谷に沿って発達し、それぞれの集落は、山襞を削って刻みつけた切り通しで結ばれている。

亀ヶ谷坂切り通し、化粧坂切り通し、釈迦堂切り通し……。寺社と寺社とを、あるいは町と町とを結ぶ苔むす古道には、かつての武の都がたどった栄枯盛衰の影が滲む。

そしてまた鎌倉は、寺社と花に埋めつくされる町でもある。

人間の欲望と権力が織りなす争乱に、人や家が滅び、朽ち果てたのちも、なお生きながらえたのは、寺社と花たちばかりであったということか——。ともあれ、風流と優雅を伝える文化は、今も健在だ。

一月、鶴岡八幡宮には、雪よけの藁笠をかぶった冬ボタンが早くも花開き、瑞泉寺には蠟梅やスイセンが咲き誇る。二月に入ると白梅や紅梅、いよいよ春の気配が漂うころには、モクレン、レンギョウ、モモ、サクラ、カイドウ、ヤマブキと、鎌倉は一年を通じて花が絶えることがない。

JR横須賀線で品川駅から五十分、大船駅を過ぎて次に停まるのが北鎌倉駅だ。臨時乗降所かとも見まがう小さなホーム、飾り気のない駅舎を出ると、東に鬱蒼とした杉木立ちが続く。

緑陰をたどると、鎌倉五山のひとつ円覚寺。駅前の鎌倉街道を数分歩くと、縁切り寺、駆け込み寺と

して知られた東慶寺。さらに数分で、中国ふうの鐘楼門を持つ浄智寺や、アジサイ寺で知られる明月院がある。

今その明月院は、真っ赤に群れ咲く妖花、曼珠沙華を風に揺らぐはかなげなコスモスに変えて、ひっそりと深まる秋のなかにあった。この一帯は、鎌倉市山ノ内と呼ばれる。

明月院から南に約二百メートル、丘陵の斜面に、豪壮な邸宅が建っていた。母屋があり、離れがある。両者の間は、五十メートルほど離れている。

敷地面積、千二百坪。母屋よりやや下方に建つ離れからでも、門扉のある鎌倉街道まで、楽々と大型車が通れる道幅の私道が、樹木の間を縫うように、緩やかなカーブを描きながら百五十メートル以上続いている。

惜しむらくは、深山幽谷の風情を見せるこの丘陵地に、その邸宅は少しばかり近代的すぎて、とってつけた感がなきにしもあらずの印象を与えていた。小さな電器販売店から身を起こし、この五十年ほどの間に関東地区を中心に家電器具量販店チェーンを展開し、さらには自社ブランドまで手がけるようになった『錦電社』の創業者、錦織達広の邸宅であった。

第一章　誘拐事件発生

1

庭園灯に竹が青々と映えている。その生え際に、一叢の植栽があった。みずみずしい緑の陰で、紅の小粒が光をはじき返している。ムラサキシキブだった。

ついこの間まではほとんど目立たなかったのに、急に実が色づきはじめたのだ。季節は確実に歩を進めていた。

そういえば、先日まで賑やかに鳴いていた虫たちも、いつの間にか声をしずめている。広々と取られたコーナーガラスごしに、庭を眺めながら佐々木智子は、ゆったりした浴槽の中で思いきり手足を伸ばした。

静かだ。

わがままで手のかかる老人の世話をして、夕食の

後片づけをすませ午後九時になると、ようやく仕事から解放される。一日の終わりに、こうして広いバスタブに思いきりのびのびとつかるのが、智子のなによりの楽しみだった。

カタン。

小さく音が響いた。

智子は、思わず両手を交差させて、裸の白い肩をつかむ。腕の中で、まだ十分に張りのある乳房が歪んだ。

――……。

智子は息をひそめ、全神経を耳に集める。

――旦那様だろうか？

内鍵は、かけたはずだが――。

智子はバスタブの中で身体を固くしたまま、なおじっと耳を傾けた。

――分からない……。

人の気配を感じるようでもある。もしかしたら、外を吹き抜けていく夜風かもしれない。浴室の天井部の隅にあるランプを見つめた。点灯していない。ピロピロピロと鳴る、あの独特の音も聞こえない。

――鍵は……？　確かに……？

自信がなくなってきた。

智子はそっと振り返り、浴室の扉を眺めた。その扉にまで鍵は下ろしていないが、脱衣室の鍵には注意している。かけ忘れはないはずなのだが……。

智子がこの錦織邸に住み込んだのが、今年の一月。すでに九ヵ月がたつ。

智子が横浜市内の派出婦会に登録したのは、三年前だった。夫の浮気が原因で離婚したものの、長年の専業主婦が収入を得るには、そんな働き口しかなかったのだ。中学と高校に通う子供は、実家に預けている。

派出婦会で、錦織家の評判はひどく悪かった。長くもって半年、早いものは一週間たたぬうちにやめ

てしまう。原因は、この家の主人である錦織達広のセクハラにあった。

尻を撫でる、乳房をつかむは序の口で、うっかりすると風呂をのぞかれる。レイプされそうになったものもいた。

錦織達広は、七十八歳、肌理の荒い角ばった顔の真ん中に、大きな鼻がいすわっている。

その年齢で、はたして強姦が可能かどうかは疑わしいが、とても二部上場から一部上場を目指そうかという企業の社長とも思えぬ振舞いであった。

だが金の力は、そのような理不尽をも世間から覆い隠すものらしい。破廉恥なトラブルが重なっても、派出婦会は次々と新しいお手伝いを派遣した。

それも四十歳以下というのが、錦織家の希望である。もっともらしい理由はつけられているが、つまるところ錦織達広のよこしまな希望であろうとは、衆目の一致するところであった。

そう分かっていながら、派出婦会の会長はけっして契約をキャンセルしようとはしない。お手伝いの替えはあっても、錦織家ほどのクライアントの替えは、そうそうないというのが理由だった。

悪い噂を十分に知りながら、智子はむしろ進んで、この仕事を引き受けた。というより、半ば開き直り、もっとはっきり言うなら、やけっぱちにもなっていた。

離婚した夫からは、最初のうちこそ子供たちの養育費が送られてきたが、やがてそれも滞りがちとなり、最近ではどれほど督促してもナシのつぶてとなっている。

智子には、金が必要だった。まもなく上の息子は大学へ、下の娘は高校へと進学が重なっている。

掃除に炊事に洗濯と、いわば主婦代行が智子の仕事であるが、そこにもうひとつ裏の主婦代行サービスが追加されてもかまわない。そのサービスで個人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

的な手当が追加されるのであれば、それはそれでいいではないか。

廊下ですれ違うとき、庭の手入れをしているとき、ちょっとした隙を狙って、達広の手が尻に、股間に、あるいは乳房に伸びてくる。そのつど、智子はむしろ媚びるような声で拒絶した。

少しでも、自分を高く売りつけてやる。そう思っていたのだ。たぶん、この作戦は成功しつつあった。

だが智子のうわついた期待は、錦織家で働きはじめて、一カ月もしないうちにものの見事に粉砕されてしまった。あの日のことを思い出すと、背筋を氷で撫でられるような身震いを感じる。

達広は、夫人の清子と母屋で起居を共にしている。智子が住み込んでいるのも、この母屋だった。

達広と夫人の間には、一人娘の清香がおり、清香と夫の信一郎との間に一人息子がいる。この一家三人は、同じ敷地内の離れに住んでいた。

達広が智子に手を出してくるのは、そんな家族たちの目が届かない状況のときに限られている。暴君ではあったが、その程度の節度はまだ残していたらしい。

だが、あの日は違った。

二月十一日、建国記念日で達広は在宅していた。

その日、清子の指示で、智子は階段のワックスがけに夢中になっていた。ワックスをかけたあとは、力を込めて乾拭きをする。二階から一階へ、ハッハッとリズムをつけながら拭き下りていった。

数段を磨き上げ、長く延びる二階の廊下が視野と水平になったとき、タイトスカートごしに、尻と尻との割れ目を思いきり襲ってきた手があった。

「イヤーン！」

自分でも気色が悪くなるほど甘い声が出た。ちょうどそのときだった。

声と同時に扉が開いたから、あれはまったくの偶

然だったと思う。姿を現わした清子が、小さく眉を寄せた。
一階から二階へと上がってきた達広。二階の自室から出てきた清子。そのちょうど中間で、智子は思いきり甘い声を出したのだ。
曰く言いがたい空気が流れた。いや、凍ったというべきか。
達広は、何ごともなかったかのような顔で、階段に這いつくばったままの智子の脇を抜けて上っていく。上りきったところに、清子が立っていた。
「なんだ！　どけ！」
居丈高に達広は言った。痴漢の現場を妻に目撃されて、内心うろたえていたのだろう。
「謝ってください」
清子は、か細いが凛とした声で、そう抗議した。
清子は、達広より一まわり以上年下の六十五歳。おとなしく、優しく、気くばりの細やかな女性だった。
この女主人のことは、先輩お手伝いたちからもよく聞かされている。悪く言う人は、誰もいなかった。
「謝れ？　どういうことだ？」
達広の声がますます不機嫌になったのを感じ、智子は立ち上がった。
「ですから……。智子さんに謝ってください。失礼なことをなさったでしょう」
「なに！」
達広は、老人特有の甲高い声を出した。
「俺に命令する気か！」
いきなり達広は、清子の頬を打った。
達広の妻への暴力は、先輩たちからも聞いていたが、智子が目撃したのはこれが初めてであった。
「あ、旦那様、やめてください！」
智子は思わず階段を駆け上がり、二人の間に割って入ろうとした。頬を打っただけではすまず、達広

が清子を引きずり倒そうとしているのが、目に入ったからだ。
「あっ！」
小さな悲鳴が上がった。清子の口から漏れた悲鳴である。
「あっ！」
思わず、智子も叫んだ。
あるいは、ワックスのせいかもしれなかった。清子の身体が、智子の脇を抜けて、まるでゴム毬みたいに一直線に階段を転げ落ちていった。
「あ……！」
奥様！　と叫ぼうとして、智子は声にならなかった。
奇妙なかたちで階段の下に倒れている清子を見、階段の上の達広を見た。さすがに顔色の変わった達広と視線が合った。
「ふん……！」
だが、達広の唇から漏れたことばはそれだけで、きびすを返すと、何ごともなかったかのようにその場を去ってしまった。
智子は階段を駆け下りた。
清子は右足と右肩、それに腰の骨を折って、壊れた人形のように階段下に横たわっていた。意識は確かで、頭を強打しなかったのがせめてもの救いであった。
下手をしたら、死んでいたかもしれないのだ。
智子が呼んだ救急車が到着するまでの間、清子は、
「お願いよ。これは私の不注意で、階段を勝手に落ちたんだからね。お願いよ。そういうことにしておいてね」
左手で合掌するようにして、智子に頼んだ。
あれから八カ月たった今も、清子は入院したままである。
退院しても二度と歩くことはできない。死ぬまで

車椅子の生活が続くのだ。
あのときの達広の目や態度を思い出すたびに、智子はぞっとする。
冷血動物……。爬虫類……。
死んでも、あの男だけには触れられたくない。
事件のあと智子は用心に用心を重ね、自分の部屋はもちろん風呂に入るときも、神経質なほど戸締まりに気をつけていた。
今、智子の女主人は、娘の清香に変わっている。母親の清子とは似ても似つかず、顔かたちから態度にいたるまで、父親そっくりの権柄ずくな女だった。
わがままな清香の顔色を窺いながらの仕事は、気苦労の絶え間がなかったが、それでもこの広い屋敷で、達広と二人きりになることを思えば、まだましだった。
さすがの達広も、あの事件以来、それほど露骨な痴漢行為はしなくなった。

智子もきっぱり拒否し、もし変な振舞いに及べば、非常ベルを押すと宣言してある。非常ベルは娘夫婦の住む離れだけではなく、契約の警備会社へも繋がっている。
その娘である清香が、きょうは留守だった。母屋にいるのは、智子と達広だけなのだ。しかも非常ベルは、浴室までには設置されていない。
ガタ、ガタン。
また音がした。間違いない。
思わず、智子は立ち上がった。白い裸身を隠すように、手早くバスタオルで身体を包んだ。
そのまま、じっと息を殺し、そっと浴室を出た。足音を忍ばせ、脱衣室のドアに近づく。鍵はかかっていた。
ほっとしたのもつかの間、また異様な音がする。胸が早鐘を打つように暴れる。
夢中で身支度を整え、扉にそっと耳を近づける。

はっきりとは分からないが、人の気配がする。くぐもったような声も聞こえた。複数の足音もする……。

「……？」

この邸宅の安全管理は、万全だった。

ということは、離れの娘一家がやってきたのか。それ以外には考えられない。

ようやく安心した。

智子は鍵を外し、扉を開けて脱衣室を滑り出た。

「あっ！」

黒い影がちらりと目に入ったと思ったときには、もう口を塞がれていた。ざらっとした感触が、風呂上がりの顔に感じられた。

智子はもがいた。

「騒ぐと殺すぞ」

低い男の声が、耳元で囁く。口元を覆っている手に、軍手がはめられているのが分かり、智子の膝ががくがくと揺れた。

清香の一家ではない。強盗だ……。

そう悟ったとき、もう一人の黒い影が目前に現われた。さらに奥のほうでも人影が動いたような気がしたが、定かではない。

新しく現われた人物の顔は目出し帽で覆われている。華奢で小柄な身体つきだった。

ピストルのようなものを強く押しつけられた。その手にも軍手がはめられている。

二度、三度、繰り返し押しつけられてくる凶器を智子は見ようと思ったが、背後から口を塞がれているため、はっきり確認することはできなかった。

「声を出したり、暴れたりしたら、この場で殺す。いいな」

後ろから口を塞いだ男が、もう一度囁くように言う。

智子は何度もうなずいた。恐怖のあまり、涙が噴

き出してきた。
手早く両手両足を縛られ、猿ぐつわを噛まされた。さらに目隠しも……。
智子の口を塞いだ男も、目出し帽を被っていた。さらに造りつけの家具に縛りつけられたようだ。
「おい、もっとしっかり持て、落っことすぞ」
しばらくして、先ほどの男の声が聞こえた。続いて、うーとか、あーとかいったくぐもった声が聞こえ、複数の乱れた足音が智子の前を過ぎていった。

2

神奈川県警捜査一課の警部補、篝俊輔はその日、久しぶりにのんびりした休日を過ごした。恋人の歌枕千晶とデートし、自宅まで送っていったときには、もう午後十一時をまわっていた。
千晶の自宅は横浜市西区西戸部町一丁目、篝の住む野毛山のマンションまでは、徒歩で十分といったところだ。
深まりつつある秋の気配を全身で感じながら、篝はゆっくりと歩を進めていた。
野毛山公園と遊園地を結ぶ陸橋をくぐり、野毛坂を下っている途中で、ポケットベルが鳴った。二種類の呼出し音を持つポケットベルの、公用の呼出し音だったのに篝は緊張した。
とっさに腕時計を確かめた。午後十一時二十五分。きょうは体育の日で、十月十日である。
篝は走り出した。すぐ先に中央図書館があり、そこには公衆電話がある。
[お、篝君か！]
電話の向こうで、捜査一課長の梅宮警視の声が弾んだ。高揚した声だった。梅宮がこういう声を出すときは、大事件である。
[休暇のところを悪いな。今、どこだ？]

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton